

富山大教育

神川 康子

目的 現代社会における一つの特徴的な家族形態ともなってきた単身赴任家庭について、その生活の実態や問題点を探りながらより良い家庭生活のあり方を見いだす手がかりを得たいと考え調査をおこなった。本調査は単身赴任者本人と、留守家庭を守る妻と子供を対象におこなったが、今回は夫と妻の生活について報告する。

方法 まず、昭和60年9月—10月に、主として富山県内の一般企業数社を通じて単身赴任者に調査票を配布し、143の有効票（夫票）を得た。翌年6月—7月には県内の小学校、中学校、高校、大学を通じて夫が単身赴任をしている家庭を捜し、妻と子供（10歳以上）を対象に調査票を配布し、134の有効票（妻票）を得た。調査の内容は、いずれの票も基本的属性、本人の生活、家族の生活、家族関係に関するものである。

結果 ① 調査対象者の年齢は、夫票で40代6割、妻票で40代5割である。夫の職業は夫票・妻票の86%が会社員で、妻は69%が専業主婦である。三世同居家庭は約3割。② 単身赴任年数は4年未満が全体の77%で、片道交通費は7000円未満が51.2%である。帰省回数は週1回が4割で、妻が赴任先へ行く回数は年1—2回が2割で最も多い。③ 単身赴任理由は、「子供の教育・進学」が69.8%、ついで「持ち家の管理」が35.8%である。④ 夫と妻の生活の比較では、余暇はいずれも「TV・ラジオ」が多く、「趣味」は赴任年数が長い夫と、年齢の高い妻に多くなっている。生活変化では、「赴任前と変わらない」が半数を越えるが、夫の方が変化は大きく、疲れやすく、体調も悪く、酒も増えたと答えている。妻には精神面の影響が見られ、「さみしい」、「不安」、「眠れない」などの傾向がみられる。妻の、夫の健康への気遣いが大きい。